

第百十八話 厳しい状況下でこそ協同の実を！

大東亜戦争の初期、第一段進攻作戦における陸海の協同はおおむね順調に行われたと評価できる。然しながら、第二段作戦以降においては、種々の要因があり、協同の実が上がったとは言いがたい。近代戦における陸・海・（空）の協同の重要性は言うまでもないが、何故日本軍はそれが出来なかったのかを観察、反省することも重要だ。

1 作戦目的・目標の分裂

協同の実効性を得るためには、作戦目的・目標の共有、認識の統一が絶対条件である。目的・目標の統一があって、具体的な戦況推移に基づく役割分担が明確になり、それに基づく協定が締結されるのである。

本メモランダムにおいて、何回か述べた如く、第二段作戦以降については作戦目的が混乱、分裂し、為に不徹底な作戦協定となってしまった。

2 柔軟性ある作戦協定の締結と適時の修正

主導権を保持し得る攻勢作戦と違い、受動的な防勢作戦においては、敵の出方に応ずる柔軟な作戦が必須であり、それに応ずる作戦協定が重要だ。また、戦場の錯誤や失敗に応じて機敏に修正することも肝要だ。陸海軍は中央協定そして現地協定という二段階方式の作戦協定であり、柔軟性、機敏性に欠けていた。

3 初期進攻作戦における陸海協同成功の要因

体質も作戦思想も異なる者の協同が第一段作戦で成功したのは、長年における年度作戦計画策定の段階における密接な調整実績がノウハウとして蓄積されていたことが大きい。協同には準備の周到と密接な調整が必須である。

4 指揮の統一の必要性和その困難性

協同の限界もあり、太平洋島嶼部における戦局上の必要性等から、指揮の統一が提唱されたが、陸海軍統帥部レベルでは相互不信が根強く、統一は為されなかった。

現地部隊レベルでは、逐次に進められたが、必ずしも奏功したとは言えない。

① 概して、海上作戦の場合は、海軍指揮官の下に指揮が統一されたが、陸上作戦における指揮の統一は不徹底だった場合がままあり、航空作戦に関しても指揮の統一はやや不徹底な場合が多かったと云われる。

② マリアナ作戦においては、現地陸海空の各作戦部隊の指揮が、中部太平洋方面艦隊司令官南雲忠一中将に統一されたが、海空決戦兵力たる第一航空艦隊と機動艦隊は、別格の連合艦隊司令官の直轄であり、同長官が運用できる兵力ではなかった。

絶対国防圏構想及び（旧）陸海軍中央協定に示された中部太平洋方面確保要域の表現は、抽象的で漠然としていたばかりではなく、要線確保の具体的な構想も同床異夢を描いていたとも云われる。2月15日に、旧協定の見直しが行われ、新中央協定が締結された。この後、連合艦隊は「あ」号作戦を策定したが、本「あ」号作戦計画は統合計画としての配慮を欠いたばかりではなく、マリアナ方面における陸海空戦力の統合発揮が実質的に困難な計画となった。作戦のための編成において、航空作戦の指揮統一において、防空作戦の指揮において、陣地の編成及び築城の思想統一において問題があったと指摘されている。

③ 比島、沖縄の作戦では、海・空作戦部隊の指揮組織が複雑で且つ陸上部隊の指揮系統と一致せず、この作戦を主宰し得る唯一の全責任者は不在だったとされる。

複雑な指揮系統下では、機微な防勢作戦は無理である。

* 協同において最も重要なことは相互信頼であり、相互理解である。準備の周到も重要だ。協同の伝統・文化のない日本軍で、急遽協同作戦を実施しても、進攻作戦ならいざ知らず、防勢作戦においては無理だ。日本も鼎の軽重が問われる哉？

